

〈実践報告〉

オンライン・ビブリオバトルの可能性

龍 本 那津子

1. はじめに

2020年、世界は未曾有のコロナ禍に見舞われた。感染拡大の中、全国の学校は休校を余儀なくされた。本学でも今年度の入学式は中止となり、新入生たちはキャンパスに足を踏み入れることもないまま学生生活をスタートさせた。5月初旬 zoom を介したオンライン授業が始まり、担当クラスの1年生とやっと言葉を交わすことができた。6月以降、限定的に対面授業が開始され、学期に数度ではあるが、実際に学生の顔を見ながら授業をすることができた。そこで感じた一番の問題点は、彼らの間で人間関係がほとんど構築できていないことである。例年ならば1泊2日のフレッシュマンキャンプで親交を深め、授業やサークル活動を通して人間関係を築いて行くべきところである。ところが、今年の1年生はそうした機会を持ち得ぬまま、日々を過ごさねばならなかった。

こうした状況は本学に限らない。「繋がらぬ ネット回線 人付き合い」これは関西のある私立大学生がコロナ禍のキャンパスライフを詠んだ川柳である（2020年9月13日付 日本経済新聞）。オンライン授業の開始当初、アクセス集中で接続が困難に陥った様子と、孤独な心情を掛け合わせたものである。コロナ禍の下、孤立する学生の不安や悩みは普遍的なものである。

筆者は文芸学科1年生の初年次教育科目（基礎演習）「文章表現の基礎」を担当している。今年度の課題は二つあり、一つはオンライン授業においていかに学びの質を高めるか、ということと、もう一つは共同で課題に取り組むことを通して、クラスの学生たちの間に人間関係を育むことである。その方法の一つとして、授業にオンラインによる「ビブリオバトル」を試みた。本稿はその実践記録である。

2. 学生の状況と教材選定の理由

「ビブリオバトル (Bibliobattle)」とは、出場者がお薦めの一冊を持ち寄り、聴衆がどの本を一番読みたくなったかを多数決で決めるものである。京都大学から広まった輪読会・読書会、または勉強会の形式で「知的書評合戦」とも呼ばれている。2007年に京都大学情報学研究所共生システム論研究室の谷口忠大氏によって考案され、2008年に谷口氏が立命館大学助教となると、研究室の有志によって運営が続けられた。その後、京都大学の総合人

間学部や大阪大学など各地に広がっていった。最初は各地の図書館などが主催して行われることが多かったが、誕生より10年を経て中学・高校の教育現場でも注目されるようになった。2020年2月19日現在、全国の291大学での開催が確認されている（ビブリオバトル普及委員会事務局調べ）⁽¹⁾。

筆者は以前、高等学校国語科目「国語表現」におけるビブリオバトル導入の効果について述べたことがある⁽²⁾。それは「伝え合う力を高めること」と「読書活動の推進」の両方に寄与するものであるという2点に要約できる。本学に着任した2017年度より、この成果を生かすべく文芸学科の初年次教育科目「文章表現の基礎」にもビブリオバトルを取り入れてきた。文芸学科の学生の場合はずっと読書好きで、自ら読書活動を進んで行う傾向にあるが、かならずしもその内容が大学の学びにふさわしいものばかりとは限らない。新しく出会ったクラスメイトとの交流で、今まで知らなかった分野の本に出会えるメリットは大きい。また、ある一定のテーマについて、自分の考えを、自分自身の言葉で、筋道立てて語る、という経験を積み重ねることは、次年度以降の演習やゼミに向けて大いに役に立つ。

以上の理由で、例年6月～7月の授業においてビブリオバトルを行っていたが、今年度はコロナ禍のために対面授業が行えない状況が続き、対面での語りを基本とするビブリオバトルを導入できる状況ではなかった。zoom授業では毎時間必ず一人一回ながしかの発言をさせるようにしていたが、6月に初めて行った対面授業で顔を合わせた学生たちは、授業が終わっても特に雑談をすることもなく、個々に帰っていった。感染予防のために距離を置いて座っていたことや「なるべく会話をしない」という感染予防策も要因であったろうが、未だ人間関係ができていないことが見て取れた。

そこで、今年度は「密にならずに語り合える」というオンライン授業の利点を生かして、zoomミーティングを利用した「オンライン・ビブリオバトル」を試みた。今回の授業の目標は「本を通して自己開示すること」、「本を通して他者と繋がること」とした。「人を通して本を知る 本を通して人を知る」はビブリオバトル公式サイトに掲げるキャッチコピーであるが、この「本を通して人を知る」ことが活動の主眼である。「本」という共通項を介してお互いを知り、4年間の礎となる人間関係を築かせ、共に学び合う環境を整えていきたい。

3. 授業実践の記録

(1) 授業の実際

授業対象：文芸学科1年生担当クラス12名

配当時間：2時間 ※予告・説明は除く

実施日時：第1回 2020年7月28日（火） 3限

第2回 2020年8月6日（木） 3限

実施方法：zoom オンラインミーティング

(2) 当日までの準備

- ① あらかじめ UNIPA（大阪芸術大学ポータルサイト）を通して「ビブリオバトルのルール説明」のハンドアウトを配信しておく。
- ② 1週間前の授業で次回より授業で「ビブリオバトル」を行うことを予告し、ルール説明をする。
- ③ 以下の準備をしておくこと・注意点を伝える。
 - ・自分が紹介したい本の書誌情報確認しておくこと
 - ・表紙の画像を用意しておくこと。
 - ・zoom の画面共有の操作に慣れておくこと。
 - ・ビブリオバトルは対面の語りを基本とするので、当日はカメラをオンにすること。

事前に学生に確認したところ、「ビブリオバトルをやったことがある。」あるいは「実際にやったことはないが知っている。」という学生が12人中7～8名おり、近年の初等中等教育でビブリオバトルが普及してきたことをうかがわせる。「自分がお薦めしたい本について5分間いっぱい使ってプレゼンする」という基本については全員理解できている。ただし「カメラをオンにすること」に関しては、通信回線の不安定を懸念する学生もいたため、妥協点として自分が語るときは必ずオンにすることにした。

(3) 指導上の工夫と授業の流れ

授業は7月28日（火）、8月6日（木）の2回にわたって、クラス12名の半数6名ずつを発表者として行った。2回とも司会は指導者が行った。1人につき5分間でプレゼンを行い、その後2～3分程度で質疑応答・ディスカッションを行う、という点は通常の対面によるビブリオバトルと変わらない。今回オンラインで行うにあたって工夫したのは次の点である。

- ① チャット機能を活用すること
- ② 画面共有機能を活用すること
- ③ 反応（挙手・拍手）などを積極的に活用すること

①については、通信回線の状態によっては、急に声が聞き取りにくくなったりすることもある。そこで、自分の順番が来たらチャットで紹介したい本の書名を書き込ませることにした。これは後で投票用紙を作るときにも利用できる。今回は最後に投票するときにも「プライベート」で指導者にあてて自分の選んだ本の番号を書き込んでもらった。（zoomには「投票」の機能があるが、これは有料版限定の機能であるため、今回は汎用性のある方法として「チャット」を選んだ。）

- ②については、本の紹介の際に「画面共有」で本の表紙の画像を見せるようにした。通常

のビブリオバトルでは実物の本を持ってきてプレゼンを行うが、その代替として行うものである。以下、授業の流れを記す。

5分	司会 (指導者)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 開始宣言とルールの確認 ・ 本日の発表者の紹介 ・ 最初の発表者に準備を指示 (チャットに書名を記入)
5分	学生A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の選んだ本について5分間で発表する。 ・ 適宜「画面共有」で本の画像を示す。 ・ カメラをオンにして聴衆に向けてライブで語るよう心がける。
2～3分	全参加者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 質疑応答 ・ 発表に関するディスカッション ・ 発表に対して積極的に反応するように心がけること。
	学生B～F 全参加者	以下同様に発表5分+ディスカッション (2～3分) を行う。
5分	指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・ すべての発表が終わったら、本日の発表者と紹介された本を一覧表にまとめて示す。
	全参加者	<ul style="list-style-type: none"> ・ その間、「どの本が一番読みたくなったか」を各自考える。
5分	全参加者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導者に宛てて「チャット」で読みたくなった本の番号を送る。
5分	指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 投票結果を整理 ・ 「チャンプ本」の確認
	全参加者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 結果の共有 ・ 「チャンプ本」の表彰

4. 授業を終えて

今回は学期末の授業であったため、振り返りのためのアンケートをする時間がなかったが、学生たちの反応は概ねよく、その後の会話のきっかけも生まれたという点においては一定の成果があったと考えてよいだろう。一方、問題点もあった。

一つは、カメラに映らないところに原稿を置いてこっそり見ていると思われる学生がいたことである。完璧を期したためであろうが、やはり自分の言葉で語りかけていた学生に比べると今ひとつ説得力が弱く、精彩を欠いていた。それはやはり投票結果にも反映され

ていた。今後も指導を続けていかなければならない事項である。

もう一つは通信環境の脆弱さ、機器の問題である。一時音声が途切れてしまったり、カメラをオンにしようとした学生が zoom から落ちてしまったり、といったアクシデントもあった。また、未だスマホ 1 台を頼りに、なんとか授業に参加している学生もいる。これらは今のところ個人の力ではどうしようもない問題であるが、今後もオンライン授業が続くならば何らかの解決策を講じなければならない。

5. おわりに

今年 4 月、一斉休校が続く中、全国の学校はオンライン授業の導入をめぐって大きく揺れた。自治体によって、ICT 環境整備にはかなりの温度差があり、対応が軌道に乗るには時間を要した。また、オンライン授業により教育格差が広がる事を懸念する報道も多く見られた。だが、このコロナ禍がいつ収束するかわからない状況においては、もはや後戻りはできない。与えられた環境の中で最大限の効果を生み出すことが教育に求められる。オンライン授業にはもちろん限界があり、できないことも多い。しかし「密を恐れずに人と繋がることができる」ことは最大の強みではないか。

私事ながら、筆者は 8 月に所属する短歌会が主催する「オンライン読書会」に参加した。東京・大阪・京都・奈良、そしてメルボルンとキャンベラから、12 名の参加者がリアルタイムで一堂に会し、2 時間にわたって互いに意見を交わすことができた。オンライン・ビブリオバトルもまた、こうした可能性を開くものである。学内のみならず、全国の大学へ、そして世界へと繋がっていくことができる。もちろん小学校、中学校、高等学校の教育現場においても、可能性は開かれている。遠く離れた場所においても、病气療養中で登校できない児童生徒も、本を通して繋がることができる。だがそのためには学校 ICT 環境の整備が不可欠である。2019 年に政府は「ギガ・スクール構想」⁽³⁾ を打ち出した。一人も取り残されることなく、だれもがその恩恵を受けて学べる日が到来することを願うばかりである。

注

- (1) 知的書評合戦 ビブリオバトル公式サイト <http://www.bibliobattle.jp>
- (2) 龍本那津子「『国語表現』におけるビブリオバトル導入の効果について」『大阪芸術大学教員養成研究論集 芸術と教育』第 1 号、pp.71-84、2017 年 12 月
- (3) 《GIGA は global and innovation gateway for all の略》令和元年(2019)に文部科学省が発表した、学校教育における ICT 環境整備についての構想。全国の小中高校などで高速大容量の通信ネットワークを整備し、児童生徒 1 人 1 台のパソコン・端末の普及を目指す。

(参考) (ビブリオバトル公式サイト <http://www.bibliobattle.jp/> より)

〈ビブリオバトル公式ルール〉 (改訂 2017年5月15日)

1. 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
2. 順番に一人5分間で本を紹介する。
3. それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う。
4. 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなかったか？」を基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。

〈公式ルールの詳細〉

1. 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
 - a. 他人が推薦したものでもかまわないが、必ず発表者自身が選ぶこと。
 - b. それぞれの開催でテーマを設定することは問題ない。
2. 順番に一人5分間で本を紹介する。
 - a. 5分が過ぎた時点でタイムアップとし発表を終了する。
 - b. 原則レジュメやプレゼン資料の配布等はせず、できるだけライブ感をもって発表する。
 - c. 発表者は必ず5分間を使い切る。
3. それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う。
 - a. 発表内容の揚げ足をとったり、批判をするようなことはせず、発表内容でわからなかった点の追加説明や、「どの本が一番読みたくなかったか？」の判断を後でするための材料をきく。
 - b. 全参加者がその場が楽しい場となるように配慮する。
 - c. 質問応答が途中の場合などに関しては、ディスカッションの時間を多少延長しても構わないが、当初の制限時間を大幅に超えないように運営すること。
4. 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなかったか？」を基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。
 - a. 自分の紹介した本には投票せず、紹介者も他の発表者の本に投票する。
 - b. チャンプ本は参加者全員の投票で民主的に決定され、教員や司会者、審査員といった少数権力者により決定されてはならない。

参加者は発表参加者、聴講参加者よりなる。全参加者という場合にはこれらすべてを指す。